

# 古典に残る災害を読みこみよう

巨大な地震や津波といった決して繰り返してほしくない歴史が我が国にはある。そのたびに先人たちは悲しみ苦しみながらも、それらを乗り越え立ち上がってきた。古典文学の中にも災害の様子や先人たちの姿が描かれている。それらを読み、先人たちと現代に生きる私たちとの災害に対する見方・考え方を比べてみよう。きっと、これから生き抜くためのヒントが見えてくるだろう。

地震で家が崩れ、人馬が倒れる様子『方丈記』(西尾市岩瀬文庫所蔵)



## 1 「平家物語」に描かれている地震の様子はどのように描かれているだろう

「平家物語」(作者未詳 13世紀半ばに成立)には、1185(元暦2)年に発生し、琵琶湖南部から京都かけて大きな被害をもたらした大地震についての様子が書かれている。その部分の口語訳を読み、被害の大きさや人々の恐怖が読み取れる言葉や表現を抜き出そう。

七月九日の午の刻ばかり、大地おびたたしう動いてややひさし。幾内白河の辺六勝寺皆破れ崩る。(略)あがる塵は煙のごとし。崩る音は鳴神のごとし。天暗うして日の光も見えざりけり。老少ともに魂を消し、朝衆ことごとく心をまよはず。遠国も近国も又かくのごとし。山崩れて河を埋み、海傾いて浜をひたす。(略)大地裂けて水湧き出で、岩割れて谷へころぶ。(略)白河、六波羅、京中にうちづづまれて死ぬる者、いくらといふ数を知らず。(略)

口語訳 七月九日、午の刻(お昼)ほどに、大地が、長い時間おびただしく揺れ動きまわりました。幾内、白河のほとり、六勝寺、皆、崩れました。(略)建物が崩れる音は雷のように響き、舞い上がる塵は煙のようでした。空は暗くて光も見えず、老いも、若きも、魂を失い、朝廷に仕える人も、民衆も、皆、心を痛めました。また、遠国、近国でも同様でした。山が崩れて川を埋め、海が押し寄せて浜を浸しました。(略)大地が裂けて水が湧き出で、岩がはがれ、谷へ落ちました。(略)白河、六波羅、都中で、埋もれて死んだ者は数えきれません。(略)

(「平家物語」より)

## 2 「平家物語」に記された地震は、「方丈記」にはどのように描かれているだろう

「方丈記」は、鴨長明が書いた鎌倉時代の随筆である。「大地震」の段にも、「平家物語」に記された地震の様子が描かれている。二つの口語訳を比較して、言葉や表現の共通点や相違点を考えよう。

口語訳 また元暦二年のころ、大地震の起きたことがあった。その様子は普通ではなかった。山は崩れて川を埋め、海は傾いて陸を浸した。大地は裂けて水が湧き上がり、大岩は割れて谷に転がり落ち、漕(こ)ぐ船は波に漂い、道行く馬は足の踏み場に惑った。まして都の辺りでは、至る所、お寺のお堂や塔も一つとして無事なものはない。あるものは崩れ、あるものは倒れて、立ち上った塵や灰が立ち上がって、もうもうとした煙のようである。大地が揺れ動き家屋が倒れる音は、まるで雷の音のようである。

(略) このような大揺れはまもなく収まったが、その余震はしばらく続いた。驚くような地震が、二・三十回起きない日がなかった(略) その名残は三月ほど続いた。

(略) その直後には、人々は口々にこの世の無常と生活の無意味さを語り、いささか心の濁りも薄らいだかと思えたが、月日が重なり年を越えようと、そういうことを言う人もいなくなった。

(鴨長明「方丈記」より)

## 3 年月が経ち、人々が、この世の無常や生活の無意味さを語らなくなった理由を考えてみよう

「その直後には誰も彼もがこの世の無常とこの世の生活の無意味さを語り、いささかの欲望や邪念の心の濁りも薄らいだように思われたが、月日が重なり、何年か過ぎた後はそんなことを言葉にする人もいなくなった。」とある。なぜ、この世の無常や生活の無意味さを言葉にする人がいなくなったのだろうか。現代に生きる私たちの考え方と比べて考えてみよう。

### ? 考えよう

現代に生きる私たちが、未来に生きる人たちのためにできることは、どのようなことがあるだろうか。皆で話し合ってみよう。